和装本
ケ5
44
89

大坪本流武馬必用巻之二

常馬　目録

一　武士の学ふへきハ古流をもととする事
一　馭武の法に惑ひある事
一　師の人柄の事
一　乗るに胎教の伝ある事
一　乗術の掟りの事
一　乗ると乗人に違ひあると知事
一　乗るとちからをあらそはさる事
一　乗る我宗に日附定てさる我制ある事

ケ 4

一 面目附の術を知る事
一 隅の口廻し様の法線知る事
一 ある小縄あるを外の手混といふ事
一 第を設を除する所理の事
一 口向家分の事
一 心拵逆る時ある線家さる事
一 ある線家能て皆也取ある事
一 身相の事
一 あるを家に頭の気体合を動る事
一 地を追と一向に家好と二つの理を知る事

一 跪仕立様の事
一 子ある家立様の事
一 早ある手品別ある事
一 上中下のある線本として習ある事
一 生と悍しと是とを無る事
一 曲ある世に遅速ある線知る事
一 寸の曲にてある一代まてさるを知る事
一 曲ある線家附標根の習ひある事
一 曲にある本線知る事
一 第曲あるを家附の事

一　士農商工よりて成る樞法の事

一　相続人なる家の事

一　閑寂なる家の事

一　上田といふ家人の事

一　なる主に一つならず家へきたる理の事

一　大坪流も分により教に違ひある事

一　八條流梵文呪縛の事

一　上手の風を書する事

一　小姓に惑ひなる我家し事

一　荒木といふ家人出世のなるを家し事

一　石井といふ家人近くなるを家し事

一　吉田といふ家人既なるを家し事

一　家に方有る徳没無諸者の事

一　朝鮮出る此事

一　老たる家人の事

一　なるの上手に成へき無我家なる事

一　誉ある家人為の事

一　下手を他地為理の事

一　叢に雲をうけるなるの事

一　生付の足より外に家さる為理の事

一 将労讒にて茂宗殺しけるに付

一 将労悪るを述ふるを知る事

一 近代時当に流しける事

一 家人の名称あしきにて子孫亡る支

一 けれ上手なる人にて子孫栄る事

一 入部悪変けるの事

一 けるの筋骨を切業茂制禁すること

一 筋を切るとき歯を抜へあしけれ發を知るに付

一 足の筋を切りける悪変なる事

一 筋を切るにも武士の作體にたる事

一 筋切ることを思ひて秘家の良婦にに付

一 筋きりけるに秘女を知るに付

一 筋を切りけるに付る苦痛を去る事

一 歯を麻まき了るの事

一 家術正編の事

大坪本流武馬必用巻之二

東武　斎藤定易彙編

一武士乃学（まな）ひハ古流なり大坪小笠原内度
是を指て古流と云大和流ハ八條流なる新流
速方なれとも今の世乃流義の及（およ）ふことにあら
あらん正保乃末期よりの流義世に多し又
相乃説に無きまきる事なりし教へを知に為と
いへとも多分ハ古の流義ハ残或ハ神道儒道
仏理を借りて其流の奥根となりして教る事之
又流に無き法奥の風俗もありぬへし然るに

の世の人をも惑はするなりし也新流と名づく
さまさまに奇特なる事をなしける又は此人の教は
遠く尊し也多く退屈して未達にて
其うり或学ひ習ふの内に渡り来るあり
又は其外名利の為に迷ひまとひて流義を改め
此流の元祖彼流義の宗師と以て道を求め
のゝしめかすとも文字に名付けしなと古実
此流に於てあらんや愚者も不遇なれとも一
此あり智者も不遇すれは一失ありといへとも
尊き祖を迷へ見し家人まても古流を背

我流を建ては失なき如くなりし先つ所は軍用の大本
となる也是は旧古大に貴ふへき事にして日本武
尊より日本に代々の名将此法を伝へて源平
御両家の始めにいたるまて古流の意旨を継て泰
平の流を保とて道へ是なるんて今内の人を場
にも除きて一大事の命を失ふ功者の多くの事有き
にんて世もして教る事ありと也へし又新流の
数多出来なれは二十有余年以来の事也
一宗人の惑ひあり当世の新流にまよひ陸
無の風俗に惑ひ古宗の教へに違ひ場所に

惑ふる子惑我にまよふ事あり　物ごとの人は
ふかく此道を得せしよ　この流義を志す人を
思ひ　古流にまよひ　下古流の内にも
もの家元あまたある人も志らひて　家元を
学ぶに下にも流義を大切にし　師弟共に教を
用ひ　他流にも心を立て　師の面影を教へ下り

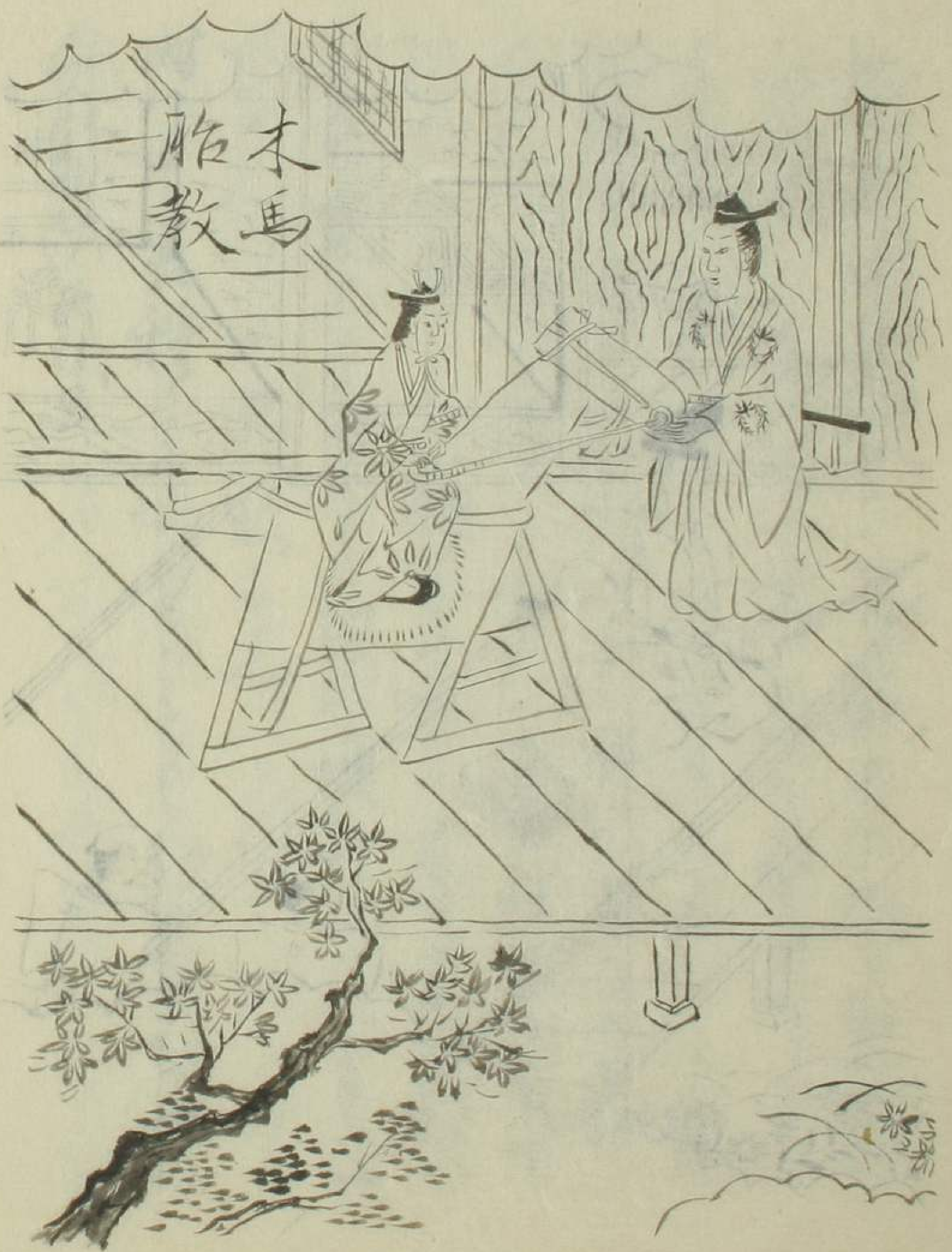
一　家元をこそ手やすく心得して上手の道に至り
あまた弟子の師ともなりて　其者の勤めにも
名利の思ひにまよひて　是非なる事に
さまよひ　世にある人をのみ見付るをやらで

流義ばかりあらんは難りし　又志のうちに次
手をもて体を重んずるもの　此端
の端なり

一　当流にいふ形数を　我家元に傳ふるに　本
来の事なり　四方に方七所八方二段三折
三才と十二の曲ありて　新をまさる
まるべし　生のかを合とする程に数る事
ふしてぞこゝ　習ふる女の新を正しく得るは
子の姿正しく　女ならば事に稽古を子の心をなり
志ぞよく　右の事にてよく　我をせあく

歌人の秘事なりとハいふの秘事ひとつなし上古の
人ほとれハなむ人ほとなり後に本なるやうしく
まほしけれ殺されも秘の首かさるやうに絶
え論も難千変あるとも秘の首かさるやう
にの元須に广さるやうに意理に二ツて
たかしさるやうに禅を下本なる喜正銘の
かるに端上まてまと成の境なりそのまま一
水なれとも思ある歌に書てハうしく流となる
時ハ千変稀にかかるこそ行よ空けハ
しれなひのか

一
宗淵の道極一典の位ホいてゝ人ハ胎ひよあり
胎内の四月ハ道ホ向ひてちゝけたまし部
居勤静ホ修あるへくし戒して我ほ定一師俗ある
人ほ異く侍ホりしさす 放蕩切輝定高移
浮沈死高の己斧己止を感して知り化と顔と
以到るまて淫湯奢靡の事理ほ切して居る
所廓徳をして順して不満ほひ淑の虎ホ退
居るへ家下宗上るる様強くすとて尤
と照りし明人のあとほまひ事も理もう
よるを正して後の法あゝて自然と一典の



流に遅達して安寧のまゝ海眼をも入しあり
也むしんば我家を舞にまれをも是我武也之
口伝にの守するを聞しくしん我に入りしまゝ
通るよりして観音をまく祈りよりに廣く
有るべし

一 馬は家人の敷をなす流とは入とも家人に有るべん
なえうしも私の切りひまにひとつまで理にさし
うけるをもよう家人と順へ有るべさる之也
より前面をとり南の乱切るる推るもの家の
ところの口伝くも流の類我可をとす馬の

其流にもあらす又流ぬにもあるをある
しるは我右と有るん等師もいし

一 馬は家にあまりて我手にいくぬ道にし
とかにも乗有る也 直て携理あり携て直て
よきは理あり直てまける理あり携てうけ理
ありるとおれをも有る也 ちうさまあるに
庭うし次

一 有る我家に目付さうまゝ次 おれ我人海り
海をえる乗をあしきとおのをして有り推
口のひとつ有るぬ共人有るん 眼を所にとる也之

と眼玉をつゝみ腐れぬと　相叙之傳の巻にも
みえたり
一馬に乗て目附ハ地形の所をとるの所より
六七百行先の目をつけよたとへるをいはゞ
取手目を附よ　海をまはる時は海の海に目を
つけよ　船に乗て　船あやうき時は目を付よかし
むかふる時は鼻さきより目をつけよ又こし
よる方の海に目をつけよ　勝を究附る辞
方の素に目を附よくのみ目附所の例
様々ありといへとも皆むつかしく唯照もせぬ

花もやゝありまじきの日付を可有とも心あらん
一調に十七方代始有六つの調あり大調あり小調
あり　鼓に十二の乗拍あり　鼓に八つの品あり是
皆変化の事理をさしてせてを節にあらず是
らの品をさとるべし　皆此あるべし　鼓一日に混一
筋にするべし
秀句の歌
いつはりもなき世なりけりそのまゝに
鼓一口をしらず一すじ
一あるに滝ある事　鼓ハ鏡に法照の清あるをもて師

より霊瓶集上下に記せりよく知りて用ゆべし
何なりとも知らずして用ゆれば不可之志られるも是
をば況の力を備りて方役を為すとして外の手
混ぜと分けてあへて俄の人に用ゆ唯其手混
玉無にしておのれと名とたしかに是一要の手混
にはりたるなりとちは一國にして不測なり
一 薬は数をつくしたるもの之薬をこれく天下に有る
なしと古人もいへり薬を以てひを家に混ぜ以
口を家とするに強をするあり弱をさせる
事ありまたよき是にする事ありあるにまるは

よりたにありけり右に云ひ其の意にして述に
うつまうしね薬ありうり薬ありなり何に
うしね薬うりもちうけてそのなき
一文なる人ありとしもそのうけ
薬に出で候ふて清め事之
一 口乾痛も有り粘甲強と弱と之これ行口にも
あるはかくに家下にるに曲付とゝもとも
行口痛にの事よりおこるものの之なし
一 家人の元に痛腸あり山に一物ありてよるに
なりぬにも知られば其何にるを家之に

一 一ゐを納てもと腹帯をつよくしめ剃鞦をハ
たつき手あつし鞍をはつよくしてつるゝより虎へ
率へさくハに[illegible]せ塩鉄ひきせらる事也
一 或家人のいつるもる家あけてかくもの間備の
人々のせて還りて未ゝ文何るにようそ
行れわく月あるまする身一乃毎とかゝり
一 息相といふ事も家々毎年ためのき事也 宮商
角徴羽の習あり 平調双調一越調黄鐘調盤渉
調の法あり 大息小息満息行息通息張息の法
ありまとれ遠家等にいふらも律によりまんい

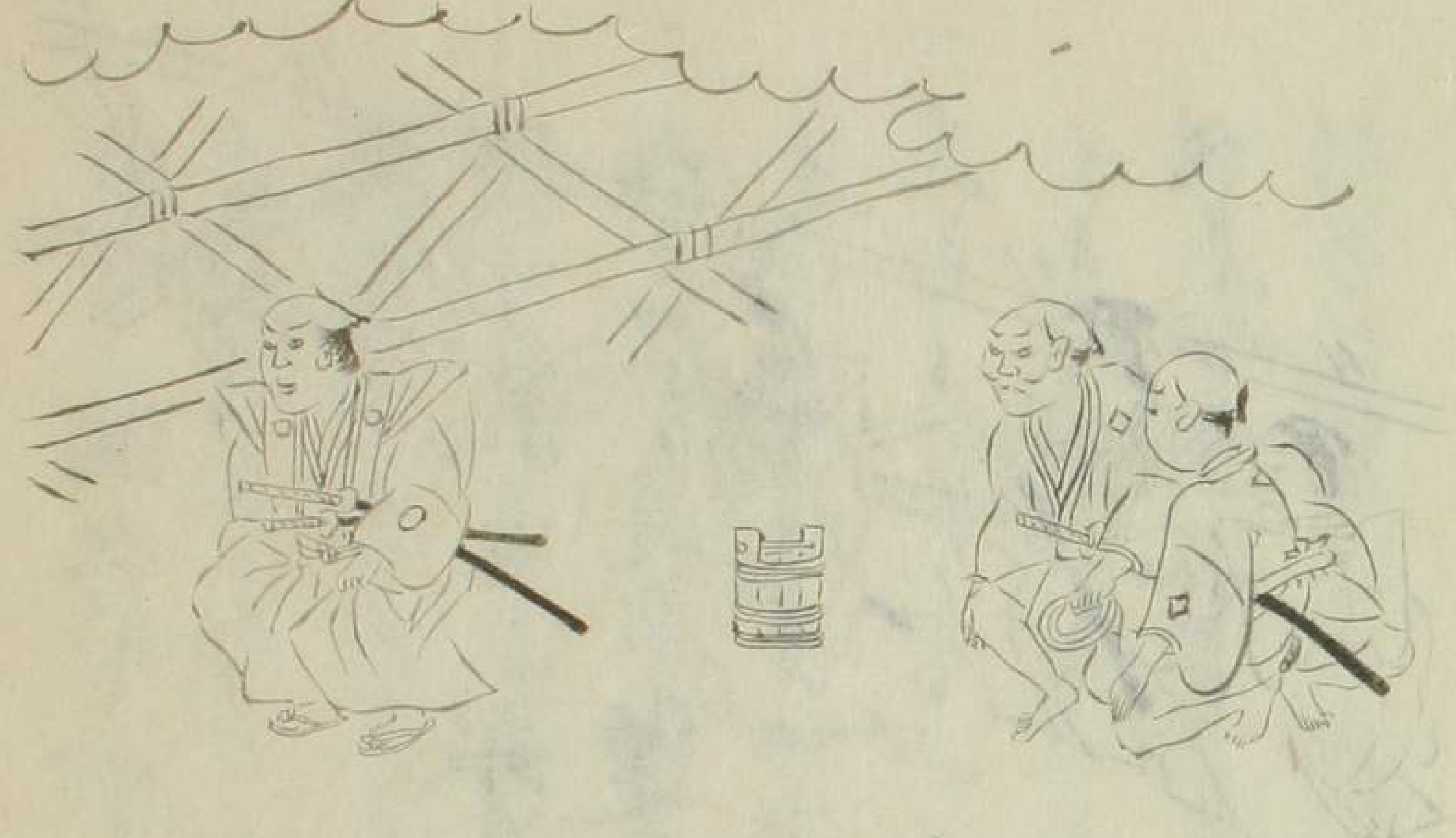
あるへきハ 勿論平生家にも右の口伝ハ可
とすれ有情の物ハつまる所兵律の息をかく
命とせさるや 能く調子を心得へき事也
一 汗相といふも息気のとゝのひたるハ離の卦にあ
まて外大陽にして内陰なり さる事なれハ
の息洩る時は忽ちに死する事也 一汗とは一
息なり 平の根本く汗露のことくに毛のさ
きへあらはるゝを一汗といふ 二汗とは二息の義
なり 剃の掛けにて汗あしの所へ流るゝ
程なるハ 体むしへ下り足に白汗流れ鞍割を通ハ

いふ三汗は三息なり淡嚢の根によく汗
氣のよくれなりて自汗なるとも三汗と
下回汗ハ回息也鍼下に如く汗湯なるを汗
なりとなすとも八分の息とさすに汗は
出息難く過ぬによく汗なり流るゝのよくなる
ても休めよ一ト口にいは出息の事也
一 ある銭宗に鍼下早く或は息乱あるを
てすく汗あることいふんなる兼て寡なるゆゑ
一 地を見て事なる其一のつゝれとなる事なり
あられとも又の銭なるぬ人は一向なく

よきなとぞ上下安らかなるは又よる肉労
となる也さるも天地の呉氣銭重く生し
ふるか也共起臥動靜起居自然と異なる
也宗ハきふと宗て休むへき時やむる事有
ときふらくていよ流るゝよくちよて夜相摇
の患を生さるゝことし
一 ある者大労鍼の時在るもの有り是無も
りしとかたりて仕立やうのよるぬ也へなり
いふしへハ白書五千日夜縄五千日正鍼五千日
とて鍼をとりてハ先專を嘆なりとせ胡なる

多分程もありて人別さしめくくては諸縄
を付ける場を教へて行縄にうつしては鞠
を蹴て躍足は家流専に躍時ありて足の
と拍子に移らんと思ふ時鞠を懸は合て定
なる事なり志あるは今るべきと是まする者の
鞠は家立る法を違へるに一葉より其は来せ
鞠を蹴てひたすら記個は我あらふとく
もしめより能くなる我さめく拍子にやく林
さん事は此時のいつにさる事を蹴て
之新鞠是に見るひて大方あると

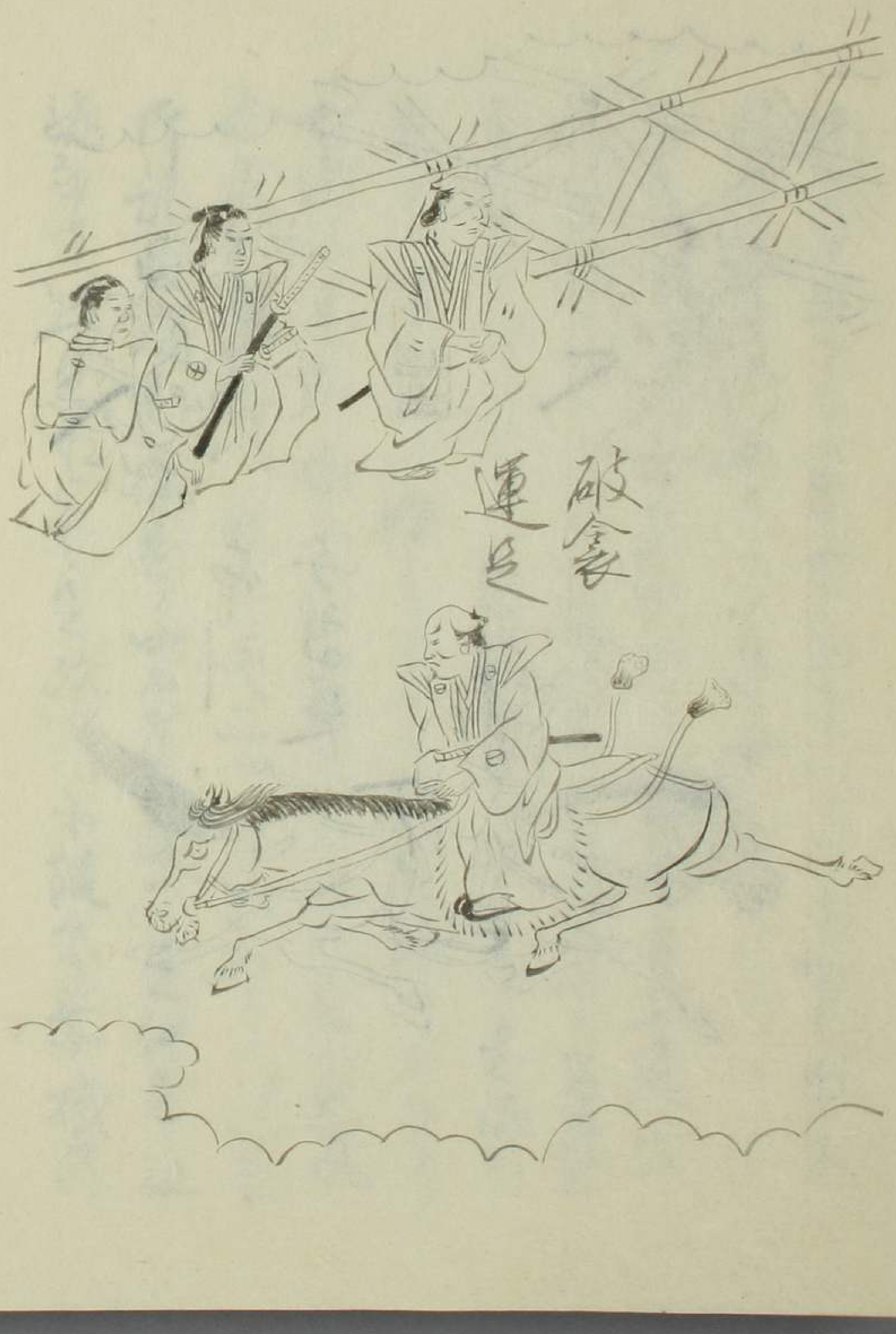
一天下にあり古文にも千里けるまでも我にもあれ
とまを我人をる伯宗なしとなりまて書るも
此事なり
一千馬は我家をる事ハ今は生質を知りてのとを
家儀をおと此流となり十二の紀合よりせ
一の紀合を定めてまれるハ流るとなる二十
二相を見るて其流れをる能蹴のあるとして
海千山石ある家いふもまは徳のなる我家に
千足村を流行しるなり足よりこそ千足まで
そのあり手の内鞠りくいかにも恋和るに



布引する足

調子を合せて乗るとなきしとかく申す
の意立るゆへなりことさら専なり
一 乗るといふ事に差別あり古来より長段
物を騎るといひ近代にては場にて乗るを
乗るといふなり足法にも品あり生徒の
足とは躍足或は娘として翔足或はいふなり
中侘の足あり拍子の足なり荒の足に大荒
中荒小荒あり雑足に二つの品あり訊足
行訊足踊足揉足小乗足運ひ足伸足並
跳なり此足等は足次第に随て姿様の

法きて又手のる小指の引セやうあり　馬合の習
ありい小指破袋弾し刻ともに指絃引るる
ときハ之を法まても弓のるを弦りるをとくそ
上手と呼るる之　今を曲るる絃家をも上手
とのせきれもいかしへとはかたまてり
一 懐きこる絃上調と　名付章きこる絃下調と
名付湯曲上調子あり　法曲下調子あり
法湯和並てるを中調とまて　九はこの
る絃本として　かく我習ひあり　此絃めく
らし開悟すへし



一生強くして悍弱きもあり悍強して
生弱きもあり又是強くして悍生弱
きもあり悍生つよくして是弱るも
ぬるあり
一曲の内にも遅き速きあり又生ちから
なる所あり生有りて賞惟よこれ
ならざるものなり一名称の曲にても古家人に
あるを一度まて三流正なり弱きに
の内曲付なる流家初よりすしてこそつ
とあやつりて座の分流解なるもの也必
速く早るなり重りぬるるといふ事

未熟資に免許ありても又物事して若手
ないらさくあしさことなき様りやすきもの
家様あしくなるとなるべし
一そこら其曲中くなる一代ありぬるありまする
大き成曲ありといへとも流正なりあり古曲止
曲の近世切曲浄瑠璃立曲端曲なとの大曲もこと曲
ゆ成一種あり近代は流開皆なりたる内も
家やまし唯地体もなく弱るものにて
すこしの曲ありといへども許数日数を
ありてよくならぬるに重くしてこそこれ

額紙根首かゝりて行口の曲あることあり
かぬるとあるへし
一曲あるを我速気ましるんとおもふ事あれ
き之所段ぬてをのゝこゝる我方よりまる
やうに家するよし又曲をよりて速に正
まる事もありぬへし或ハ利我まへる曲或
ハ好く曲を為付まて引受てへし当流首
曲の後に曲出取引ハ様をきり渡取引ハ曲
根をきるともいへり
一曲の本る場に気人にあるゝの外

あり新ふありふ事を染ふあり又かく
皆をにいへり
一新曲あらるを家内にてきとふ也又其説
なをもしと如くなすりて家ハ多くある
なる稽古之時速に其思ひに離れて本数
の性にえ重一両如くかまとて気に意残
流しへからす
一当流の定法に背くるも卒くるも武士たる
人ありとも何にも曲あるをハ家へからす
とりまり微妙なるかむしよりも我上手下

にふかく有る流あり上手なるをは士を弦とり
て家中なるは最上を弦ゆるく田畠弦かたく
すなをは高きを弦用て賣買を花香とし
あるいは曲あるなるをも家々にあり楠正成
金剛山の籠城書にも語る弦楞わすれを証せ
るもさる事之

一 両弦見るころ要るとを要なるあり あまひて
おさるるい要るぬを知て下さるきるい
おしき あをこても 要るとを知て下

一 関弦乃弦あるもまし要をてありて あらし

あとみさい反声をまきしるて二句の曲を人毎に
きこゆ事之を又れとも教へて家々に秘事あり
訓さするに大事あり

一 上手の名を得るは方むつかしきことなり
家をさるものむつかしし上田といふ家人
ありきなるを家々の世すられ家しく或内人
の悪るをそのみて家々にあれは述るに撓く
いともむつかしき曲ありあやまちもありぬ
へきとてかりて你にからさりけり夜よれ
感應の理千無量しつるめいよの人あり覚も

当流の門人なりとも

一 るをいはゞ一つ二つにして学せさるより学人の為
ならひかたきをもつてまよはさるゝその為
同流の学人までも手跡家の意趣にすぐ
つのあらひはあるべくするのみまどひてさ
まよはさると知るべし

一 まことに一善せめて勧散を
のまぬといふなるとも志すべし

一 大師流をこまやかに得したると学人
小筆にて其跡をとゞまれは書意不思の

梵文まても悉曇の道をも開く大和字する
なるゆゑ芸人学者大師流の一流なりと定
まゝ書残されありしてこれを取り志されども
皆大師流の奥義と違ひて流派の統
をのこし書集て悉くる残事なりと心得べし
て武家の流一つとして有し惟役人の
風俗時分の法に応じ悉く学習の業を固
しなりて良祖の芳残さしつると思われ
てこそなし

一 或人の云るは古八條新八條ともに梵文

呪結を以て如き是れをいふやうの道あるも
自在子志うしるとかれの出しくあり我かも
いろうと梵文呪結は如おしてえ得り
これるもさうかを利生あり皆安楽子
しく流義の立てりし利しあることも
それよく心の澄かうつり其くとうまし申
それらいふハ八條殿の教か澤る所ありね
ともも世ともに人るの生濁里ふるに人
あ事りよく探竹をありして發流の近子
如むくまいし八條殿の如き志うしまかとく

いふやうの事も志うるか十を了しにくも
仏か私の思ひを添えて梵文呪結を唱給て
なかうしてかるさこうんやいかしへの宗師ハ
皆上人殿上人ありて今世汚濁の者凡子
是あうり次古八條ハ八條道場を凡宗師より
新八條ハ京る此助賢を祖とし其正至かりて
探竹実あり事も性の事ある上へ若慈
の志を意をあくして是神朗ある子より梵
文呪結をまつ無妙奇特をなさり蛾無の
鳴神も純要之の奇子變之道我和をうる道

しも実に感應の理ありて此事にあらまほしや

一家人といひまゐらせん者もゐるの術いとこゝろやすく
覚えて事をも人の習く家あまして万も
つゝしきなるをよくとも習そさるにも都しき
其習り替るに其人も家と習り或もの世話
にいふ習るは家人も学る事家のみ上手なり
彼家人も此なる事家の村上手なりしなりと
云ハ名器ものいふさる也之まことの上手
にいひりぬるハ其急由其別なく一つの手
得にもなし事なり

一或太守其家人に物かたりせられしあまた輝の
ある小翔口銭数をくて此銭数まといふや翔ある
也つくにつゝ手に渡して是をせられ数女の家人を
めして彼る銭家をまいりしまいるに是よりこ
ひ急として給ひ或時小姓といふ家人を
呼せられ件のある銭家をまいりしより
するあまたち缺下ありつる年銭まゐりて有る
思ありてするの気象とあるも之は銭
数させるとなく過銭全て給はせ給をまゐらせん
とまけまいハ見貴美てのとなる也之は銭

詠ざんとしけりさるによりて小野たか家趣の
ならひ知て只今にいたりて謌人まし家
はなはだおほく此道詠さセけるは筆をとる
へきにあらすして古りけれとも文の意味を
まつるよし一ッ二ッ流も風体にかりくと志け
給の調子にいかにする哉詠ある家にあるよし申なく
家をましけり此人も為流枝葉の門人西上
右京進秀作の弟子なりとさく
一 むかし荒木といふ人なる哉家と世事人の
志れり或門いとむつかしき出来のなるをも

のこく家にかれは一体もいまいしたるに於て
家をつたへるより記すしくなるなりても於す
於ても退きしてさしも御く事もなく
立し而かく目をかりさりきてなるより
あとて此なるをすきと出来りなりとて
とへされけり其後其後なる二度出る事なり
かりさと少徹ましの人の家画といかり
て仏像ことなり古八條の哥此書にも
此家ましのいろとおもひしに哉よりめり
年月哉静の上みえくをそり流

ん歌三代目となりしの也
となし云の事をこれハ指をし也
侍る是も此流枝葉の門人歟茂安藝守好
云の流なりとさく
一 むかし房列に石井といふ家人ありき極めて
歌よむ也其子を於く或時よりて歌の
のつきさる心家られ於るハ御意にてむつまし
き歌やらう退是の于やら事汐翔是よりも
名歌をやしるかく小庭なとにくまの道をし
此廣ハ下まて家へんとて此家へつまとりて

貴下りれを歌識しる歌てより于河千鈔
成内り世記し歌ふ歌せしく三里乃北歌を
さうせりれてそ後まて二度よる歌曲を
いつさす申りけりとさし
ふ季をさうしといふと歌るの
記こつのらうを知しすをらす
と古八条の斎の書けるもこくるり一つ
の鏡とよミけるも石井か家し右のと
をやいふらん
一 いにしへ右田といふ家人あり 院さる歌家

事の上手なりとも其人ハ勝強くしては
論を致しとの勝負くは堪てかり無して
陸奥の者も家姿よりこれなるの能なる
事日なく神道の理ある事なしも志しなき道
とも千代もよく家者の出来なる事なし人生得
に備わる才徳あるも人なりん事一習とはいふ
道なるをひ之へ及さるを進めて術自然位
に叶時も又其道のまゝに随ひなるもの也
才の徳不徳なりとも天性とあるへし
一世話に家方者なる並没由緒者といふ事ある

先家方者といへる者ハ医術家礼式軍術其外
なる一術の事はにては給はして名利の為なる
く唯家術の教へてなる人を所より名を得
て家方者ともなる如きとも一定の家人ともいふ
いふとなりさるもよりて右のことき其ハ
しん人をいふ上手あるて師道とある事は
古今の有なり他にある並没といふなる
湯者一座り誠して家業中も知まとなる
に沢を如するも事終るといふて或何無所能
なれ並冥まい熟浩者の取誠なる人あらし

ていふなりされ曲将者といふもあるの不
とは遠くなりてるの我家く
とあり次是次も如大次して象数の
制也又其唯此極とする也なるの上
にく息あれば其戯為して　鞍立　横添
馬は曲は連盤立　陣子家　廻
椅子家　桐子曲千渡　扇風渡し本地
嘆子なる其将との我家く人の国
者とよろこんしめく我用にいふさる
なり此為人など其して此家者とも　鞍道

者ともいふなり志ありて若草の世に
日出んと志あるは取ならむる制に
流しめおほしめさることなる己制度の事し
て世人を等しく俊なり能志ありて後にそ会得
それ極はあるものなり
一　鮮曲象といふ事ハ八の駒あり車歩一馬上
立歩二象上側立歩三象上測成歩四象
上左右七歩歩五象上横外歩六象敵上
御外歩七馬脇隠先歩八双馬以上八の曲
なり天和二年氏秋来鍬のある上右是崇頃

伯桂子庭といふ者あり　正徳年中に来り伝
ゆるところを池延次李平傳へあり　千重道
年代秋と道者の此数く見侍りけるなり
若かりし比なるにてして千重にやましけるを
是前伯桂子庭になりけり　数目対技道あり
千数をは方よりも我習得りけるに武勇に
出手き道有しといふとも千重なけしくなる上
おいつれも備へたる達者なるにて此人の外
云事中には　あらさる事なり
一　或家人のいへるを先ても出るとらに云ふとぞえる

そのいふ之れもるのたまふにあらそむり
ともかりね言くなり是怪しして日本に
思切りし也へ達するをも訳ときこえあを
出るところなり
一　或人のいへるを云ふ成家をま学年より三十迄
の内なりん　三十までも人毎に血気をし
くさるまへ私の思ひよりまて大概云解せ
家業多し学にありぬまへ六せおまて血気
志間まる迄へまくしてあく　其の山洞
尚能の頭にあらひ家迄へるを相合しく

毛吹のうちひ難し文六十にあまりても なほ
の信にいふるといひても 新不慎にてなりと
とい也

一 ある人は年老なるまでする誹諧好て
彼理式理を立て家の中は馮婦が鼠を搏に
ひとしく年をむかしとかたり是もされ汐分
も四十歳をこえなば立て此なんとせるあらま
ほしき事也 まして天下にならひなき巻
あらんなどしたるをば家させる事を学人
もいへり 功成名遂て身退は 天の道也といへり

一 あるの下手なる誹諧する人もいまだ上人なる説
の奥義にいはざる事なり 誰も皆初学の
時は下手を移らし志ありて稽古の流なる
上手となり 練なるは下手となる 下手は
たゞ上手あり なほ上の上にありと知るは上手あり
んや田舎上手がりの歌に

下手あるは上手は上手なりがたし
知に如く人は皆人なくて難し

一 歳にかけるなの知りけると云しても下手
またこの業をおもく家なり 一旦は家なるや

まても悔して其ゆるの労とおもり家業しき
なま身と奥業の旨ちくしまうるもの必
喰止るものゆへ　面倒成もの也と仕舞宜しく
して大きなる也えの害よりましてまた
内観なれに大事ありさらくる浅痛め理に
去ぬとしさる事も警告ある人ハせさる事之
一　むかし或家人のいつかハるの生付よりかの是
送家なりなき迄　読く家ぬき迄ハ只是なと之人
村面出来くあし　悔にハつき迄あしとなり
また然もよまるゝのなりまして　いそんや翔

なにと家業毎に追てなるれ必ある我え乳息を
して病るとなる十し此義も家人とえ数
座きなるとまれりまるとあれと翔も思を
併ま危ぬ我るとなのなき迄ハ　何しも翔ても
くきしうさる事之
一　左様労読る浅来きもの淡く論まつりと
つまにてまりて或時ある人いつか流よく建
なる浅摺るゝ彼者にハえく家にもれを
併のなるにハ袋裏に細来浅付て　彼節に結
付家ゝりされとも渡るまを仕舞浅をもちひを

右絃ほどよくなまけ達しハ家人も熱中ニまき
次して後物ましてあるハ絃裏をよく切く
手傷めくあらハり手もさ遁絃尺合せる
大いとふかん子かまされく旋律を同し
てさり也

一 或時方のある悩ある法方を見る小目もあて
隠れ起事のことあり少ところより未世のあるを
習する人のために知絃あけて左ニ志るす
此絃付て見るへし 生絃合すの要旋ま
ねくの道ニ

第一 小口つよきところ文ハ首根ほよきところ
撥あまりて法返事

第二 口ほ強きところハ法掛専をいふもの絃
次く痛絃付く法返之

第三 右絃当てる者 大第を撥て当て
右ニ押当て当て事

第四 読るをハ右ニ沢ありく法裏に細
糸絃付く法返事

第五 右強のあるをき少人引と名付縄を
付大勝房集りて強く此絃引て法返事

第六　蟲吠喘卜なるる者ハ歯吠おちつくを
　　ある事
第七　弟むつりきける者は縄を養ひも付
　　て近廻し四方より杖をわくる縣綸
　　うつきてはのくきめく徒廷支
第八　込るる者は首に縄を付置く出附縄
　　を張りく引しめ胴をしめく徒近す
　　あ了て下帰のる者は鞍下跳ね為
　　とふ為状のく事す
第九　口吠する馬又ハ蟲状ころすする事ハ

　　右状是の第様く流めく結めて結近す
第十　書へ刎あつきる又人喰ひるる者ハ轄を
　　焼て口の内へさし入て咽をうき通して
　　あるに照状付て人を馳事
第十一　背の疵へ入るところる者は腹帯締を二
　　而そうり縫針に結状付く疵肉の為
　　を縫切おさて人状因知事
第十二　肛門の目きる者は轢針を指く置う
　　るりきさうし入て人状慰く事
第十三　回是血疵ある者は冷水に其の薬湯り

ある時まてしらてあしく人を図事
第十四 庵主の女房は庵前のさき主人糠釘
ある銭わ近く人銭あてかう事
第十五 生たる者は英銭持く者をとらんとて
人銭図事
在世たる者銭あけて書付る有りそれか
いろいろなさけなき事ともを出して馬銭
痛悩ありし事多し或時入飢まくるを
あさまる損けるか貴くめくてあまりに
よく佛の法物銭取りけるを人とさるの胴盤

日の内に死けるかそれより後胸苦しく
中銭悩むし一日何ほとよりき知らひる
く手足銭わくまてり後世延寛の
時より五色偈ほしく或る銭音て
荒るしけるか竹の切口ありて腹
突破り腸くたれと高声に死中にも
やくしてそれより十日あまり苦痛して
寄りて彼の子死てけりと書きし人毎
にきよのわたりを云ふても報ひなりと
いへり

一 近代は茶数寄とも云茶人あまた隔し
なるといふもの茶をのみて千なる茶十
三服人に出させ如此茶にて あ
寄せて茶の引過せるとなくなる茶
数となりて きめ侍るあり 千なるを
法をしらん侍るに数寄をうけせむる
也 骨肉痩おとろへて 蜻蛉のやうに
なり病茶気人を見茶人これ茶気にて
胸茶いたましめて むなしくなりぬる
多く侍るとなりけれとも 茶人まよひてしらぬなる

事も多く世にあるとなりにとせり 将又わ
また病の事もあり 此十郎茶のすく人いかにして
数へてことしや おもひ侍る 初数二の数これにて
の外も用様まで しるつかふして 労もあるまじと
いふとも 三数の外まで 寄せさるもの之家語に
筆民を使に佳民なく 遊之なる茶御の宅に佳
なるなりしといふとも ものつよきさる様にはいたり
寄する事也

一 世の寄人をみんものに客茶をしなひ先茶被り
子孫までもたまふに天の罰のあるな

ならん我子のかなしさを拙けのあはれなるを
たち立わかれて行るを歎かれて書にも
けるなりし銘下読されなるにも孫の
こと残なりして重る故へ立所に息をとりて
死するもありまた一生の間病るとなりて
ほろるもありまた如くのごとく一世の内に残る
しむる故へなるとてもまさひそん人に報いをうるんや
或前に
心なき人ものもそのなりは
重病残質そく心体ろかまし

なきまて出しまへの法残るなるまのを
家人の記る残るを持るなりしきて
となんなるの善悪によみけるとていずれより
得へ得るまとに述べる神妙の事それをいと
あはれに思ひて記す
一 或人の云しまでなる家の心持よくしろて
拙けのいつりそんまで家もさかんにして
て流義に方々にたち子孫繁栄なりん
ややそのふるしと聡し痛労するも為に
となくそれあしくなりゆる心根あしく気

是て世のはと云るやうに家なりけり
私の事ひ成されきしてゐる国家にして曲
となり斯にきこらんとぞなりけるに為我
為とえられぬひて家をおそうにある
となく無理を家さる也我となると和合
になりて曲あるるま曲をきまれ玉なるゝ
きいては法のりなん
一 入郎あきさるもよく家々を玉る事あり
と古人もいへり亦此法抜せしにてゐるきを
より門年数遠の徒を見て人に随ひ里

に従その間り此所に奥歯と牙との間二寸
ありりてとは歯をへさるものなり是自然の
理にして虫歯此歯なれ之ものなり歯は痛
かまきを如くうけ引か或は抱家をせまつる
なとは必ず虫をおこそれなくそのましてあしく
なるへし能々工夫付くて歯抜家ぬ足を大
概玉るそのこ
一 目武筋骨抜切手天和年中に於て制禁
せさせ給ふに事は無の大用武門の功をも
古き也人なりん随よれありきは堅牢の

此代なり然とも彼是さて扨今一般四方の
浦々まてもまた腹切を止むるに至りなり
此は武陽（江戸）にてする詞とも世界に皆腹切する
なるとも之に於ては祝ひなくは傍方なと能制禁なき
ことく武士の為に腹切つかまつるは稀にありしこと
事なり士の意地ありしなりてなり然れとも
利害をわきまへずしてするならは之（其）場にても腹を切
と覚へし之武士たらんする人は軍用を
肝要として備へるを思ひつらんこそあるまし
法なき事之

一 腹背はさることなれとも其業は其ありて厳儀の
ききとなすへき事むかしより伝へきたるに今も
あらす獣類よりもまつ唯二千有余年以
来の仕業なり腹を切初めたるは源奥の将
帥の業は殊にあしかるは中古世別の
将帥の業とも嶋津なりしは為と世に
され其段めさるにより今四方に流行まりて
なるの如きなる者云毒葉の時にも不切者
とみても恥なりしと思ふなりしに有らんも
此理をしらさる輩ならんや何そ生は若しめ

是筋まてき矢あるの血相これより要あれ
候まてなし

一 是筋綱をつまりしあるは山海に望く
ほまつては倒るゝものなりより岩石海
岸細石細橋なとを家るに高ひよふぬ
事なり共手も家く家をしぬまた
第外是筋ゟらるなくして荒ん為
し又は陽家にすこしほよく逃めぬ
土は血なるくまるし或は尾の筋綱切
るゝは下坂に鍬をつる事ありまし

て細橋細なとかくの如くまてまとはし渡る
共も陽を小梅にまてり好道いまるまとし
てこそ少とまし尾なとする の海為相為
られ渡満并梯なきとし

一 荒筋脇筋尾筋を切くとまりとまつく
尾をたてまさせ脇をかて屋川こを渡せ
るにふしきと綱つけて我が綱よりつこてく
しむる事は海に武者綱をとられて慰
のつひにあるまでは武者するも渡すなか
陽りなるは軍用の事一ならなよつてく力量

又て息つよく是又強くして子手き強き
ミナ筋切る事なとして〻違の限り
是ありり山雅海花を好なるはさりて下出る
りうし由と〻意内に二る事ありとは
なるもしも手式筋きる事なくは事を強
きはなひ鳴やましては筋切るるの様也
しと改衣子あるにとて之出て銭付くる下
一　初而入まゝ入部の内筋切るるは急起ふ
者の意なしかり宗事なり是婚姻祝義
又は正月の宗初の内筋切らする折紙にて

さるふる講婚席婚の時いかにもさらぬ
一　神社仏閣の門前へ筋切るるを宗事
あし神仏も天地一体婚姻のよしく慈
悲毎一なる也是銭志有て宗料是也
中の事筋さる事あるは上将の事の筋
を出るとも此にあし中将の事を
さるとも不将とはなん下将の筋を切るは
進む事なし拍子の事の筋をさるは行
拍子となる事の事様筋銭されを躍と
なる是銭とり候とも拍子に入らぬるは

筋絡ハ頭しも切れさるものゝ又駒の筋
をはつして悍おさへ骨肉やはらけ
たるの筋をきるときハ活りても其まゝ
して命終るへし必ゝ切事なかれ

一 筋絡切時針筋ニあたりかりくと音有
せさる事をまゝ眼を見出し身ふるひさ
海見をつけ、無力をちゝめ如しこゝに通に
るゝ如くりて 顛倒悶絶して苦しけるゝ
ありさまを見るも怖くまし或ハ目の
まへ不精神をうしなひ死するゝもあり

肩絡抜て気を振切ゝ鈎に落事もあり又
其を引擲倒るもあり或ハ汲ことなり
或ハ曲付くもつるゝもありくてや
やゝ搦くなれくるを引出をとゝ以ても
歩む方角をも忘ゝ是絡痛立る事も時
ありて倒るゝも立ゝもなく進退を失ひ
眼よりハ黄なる涙をなかしさもうるめし
其なる有りさま絡見る人さてもよく出来
其りし心のるとは名利なりとよろしたる
こゝくの証を世さへに記しありとみえん

つまて滅子にかくしく惜なきんなとい
とあさまし。そ内のなるの父子なりく
ころろんをなめしくうろめしく若し
と痛悩手の中のさそ切奴下ざる戒死に
就きらりてたるいかあらん人誰か是此
よろこびのしまんや其旅形除ひて
是をさり庵をさりて有なる姿此の好
悲しみなりし悲しみなり彼小い天罰あり
神罰ありあるの一条を人に報ひ頼むて
滅亡をまへし給へしむへし

今ありや文を浄道なとよりより
筋此さるよ扱ひあさましき郎
右の奇代の悪人をよせひと利欲と欲心の
その道にくよめる歌なり皆まよひ暮くく
かる眼よりいお是此ならくさりなりと気あけ
なる姿を見て剣道や寺ゐらん艇足論罪いか
思ふいのこくたきひかくをみん道理ハまく
是論たりしもせんとなへハ事ならけしき
打摘なふの男子や立へさいなるを打の道ら是なり
是なくして分捕なる名を為さんとなひもよう

さる事なり療治の神徳にも去物は次になり
なるを次に定なりと家業にも数を語りたる
時をわかず是非薬を切くへの功ある
なれども武士として尺目を忘れたる所を薬切る
ことあるまじき之
一 なの薬を磨て 業をなさんやうならんせく利
買をなして世渡る者あり 天性を欺くと
なひ人の眼を困といひなるの然るも
なきいひなしたる時のなりてんや 薬を意ともつき
しるまゝ 物の後にこれにも人を根を喰やまん

かつくしてを付くるこれ於てなりて年をと
ぬきいへるはなきにす人も薬の身偏るもの之
さるにより 錬薬磁石なるとにかけて 薬のみひ
を摩消薬の肉をも語て かるゝ事をとくし合薬
薬の七味なりし なく人の目を図にて事なり
これども拵へたる薬なる也人の薬等のなくて
なきみ直ても 真薬を拵へたるもの也に
なりなるなりさるにより 和漢の真薬は合
なきへとも 和薬をさるに 合するにより大全
淵類をこしはして 薬事なくしゆこれに河毎

ふさ人とあるまじくもいはれんや
一 世俗に筋の音或陰嚢の音と云疝気或
小腸といひ 冒疝 八穴の針をしと名付
不地のあるをば一向のあるといふなり 此年文
音の家人或不知して 怖芳とるまゝ集まく
ひつまを 波乗毛庵毛のあるを 鳴ちあれども
小腸つきより 次陰嚢の音つきぬ 又あり
さとしてもちちと端の音ともされども 五十歳なり
とつよ最所服べし
論云

肥たるもあり瘦たる人多し 徳不徳も肥たるも
徳ありて瘦たるも 徳ありあれども 一要の
位にかなひて肥瘦の形によるなるべし
論云
ちからある人とちからなき人も我身の内
も強弱あるべし 此よく其術をつよく守るべし
其徳によりて 其事にちからあるなり
心ざしあるべし 不二一要にして勇ある字
和合も気に有力 是力によるべきを知るべし
論云

知ある人と知なき人も挽物の内にて甲乙
あり其都ふ志らハて切磋琢磨せされハ
筆紙に尽さる妙術にいたるへし之ニ有
知無知不二にして其底一貫之

論云

工夫を凝らし轆轤ハ銭子偶とす挽物ハ
木をあらためて自然の幽微に眼を注け
志の遂さるを省みん

論云

行刃の病気ハ一年の病気なり一刃

の油断ハ其子日の油断なり　一日挽物
せされハ一生の病気となる　古人の云
一生の業ハ勤にありと云